



中国・広西チワン族自治区南寧市賓陽

## 有数のサトウキビ産地 機械化遅れ大半は手作業

世界銀行タスク・チーム・リーダー 鎌田卓也

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】



こ賓陽は、広西チワン族自治区の首府南寧市中心部から車で2時間ほどの市下の町だ。サトウキビの収穫時期の冬になると、製糖工場の門前に毎日100台近いトラックが列を成す。これは収穫したサトウキビの買い取りを待つ農家の車列で、時には数キロにも及ぶ。

中国はブラジル、インドに次ぐ世界第3位のサトウキビ生産国。中でも亜熱帯の同自治区は、同国の収穫量の約半分を占める最大生産地である。土地は景勝地桂林のような奇岩が林立するカルスト地形だが、その岩の間を縫うように続く平地の大半はサトウキビ畑となっている。

実は、当地のサトウキビ農業は栽培品種の含有糖分が少ないことに加え、生産性が低いという課題に直面している。大半の農家は小規模経営で、共同組合や農業金融のシステムも立ち遅れている。そのため収穫機械を共同導入できず、刈り取りはまだまだ炎天下の手作業である。このトラックの行列も、農家が大型車両による共同出荷を実施できないことが一因だ。

昨今、サトウキビは環境に優しい燃料源として注目を集めている。中国のサトウキビ農業は国際競争力がいま一歩といわれているが、広西チワン族自治区の農家がうまくビジネスチャンスをつかむことを願いたい。

(写真も筆者)